

アンドリューの
歴史エッセイ

江戸時代の 食と 加賀藩

vol.1

江戸時代の獣害と ジビエの広まり



最近、石川県内でも話題のジビエ。じつは江戸時代にも獣害はありました。江戸時代の人々は、どのようにイノシシやシカの被害から、農作物を守ったのでしょうか。

江戸時代にもあった獣害とその対策とは

近年、全国的にノシシやシカによる農作物への被害が問題となり、石川県でも狩猟免許を取得する人が増えています。それにあわせてイノシシやシカなどの野生動物の肉を食べるジビエが話題になり、県内でもジビエを食べられるお店が増えてきました。ジビエを使った商品もたくさん販売されており、みなさんも一度は食べたことあるのではないかと思います。

石川県でイノシシやシカが増え出したのは、平成に入ってからのことでは？という疑問をお持ちになる方もいるかもしれません。確かに武器としての鉄砲はそうなのですが、実際の農村では農具、または猟具としての鉄砲は取り上げられてはいませんでした。なんなら、加賀藩前田家三代利常の時期には、藩から農村に鉄砲が下げ渡されることすらあったのです。

しかし、5代将軍綱吉が生類憐みの政策をはじめると、このような状況に変化が生まれます。綱吉は鉄砲改めを全国で行い、村の鉄砲の数の調査を行ったほか、猟師以外の百姓には玉が込められていない威鉄砲しか認めない方針を打ち出しました。加賀藩はこの鉄砲改めを強く進め、領内で認められた鉄砲数は、三ヶ国で約一〇挺という少なさでした。また猟師以外の百姓がイノシシやシカを殺した際には、必ず土に埋めなくてはいけないという法令が出され、綱吉の時代は日本でもっとも肉を食べなかった時期だとも言われます。

生類憐み政策の終了と肉食の広まり

綱吉が亡くなると生類憐みの政策も廃止となり、18世紀半ばには猪やシ

すが、じつは江戸時代にもイノシシやシカの獣害は問題となっていました。江戸時代の古文書には、当時の人々が行ったさまざまな害獣対策が記録されています。番小屋を建てて夜通し太鼓などを鳴らして追い払ったり、シシ垣と呼ばれる冊で囲ったり、落とし穴に落として槍で突くなど様々な方法がありました。一番効果があったとされるのは鉄砲での駆除でした。

江戸時代の村の鉄砲と、五代将軍綱吉の生類憐み政策

このようなことを言うと、鉄砲は豊臣秀吉の刀狩で取り上げられたはず

が増加したこともあって農村の鉄砲は増加しました。当初はイノシシやシカ肉を食べることは少なかったのですが、18世紀も後半になると敬遠されることもなくなり一般に食べられるようになります。イノシシやシカを食べさせる店は、江戸では「ももんじ屋」と呼ばれ、主に鍋で食べられました。値段は1膳16文だったとあって、おそばと同じくらいの値段で提供されていました。これが明治になり、牛を使っただすき焼きへと発展していくことになりました。



津幡運動公園の近くに立つ猪塚。加賀藩はイノシシの駆除のために、イノシシ1頭につき米1升の褒美米を出したことがあります。数日で数千頭のイノシシが駆除されたことから、供養のために建てられました。

【注】石川県河北郡津幡町字杉瀬い3



【参考文献】

- 矢ヶ崎孝雄「北陸における猪害防除の研究(一)・(二)」(『日本海域研究所報告』第24・25号、1992・1993年)、同「石川・福井県下白山西・南麓における猪害防除」(『石川県白山自然保護センター研究報告』第25集、1998年)、同「能登半島における近世の猪鹿害防除」(『自然と社会』第69号、2003年)。
- 安藤竜「加賀藩領における鉄砲改めと狩猟・鳥獣害」(『かなざわ食マネジメント専門職大学紀要』1号、2023年3月掲載予定)

安藤竜 (アンドリュー)

金沢歴活代表。1974年兵庫県生。金沢市在住。関西学院大学大学院文学研究科日本史学専修卒業。専門は日本近世史。金沢で歴史イベントや講座を定期開催中

